

東北地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討

小 原 淳

I. はじめに

筆者は、日本全国に残る日独交流関連の史跡・史実を地域別に提示し、そこから日独関係史の再検討を行おうとしており、既に北海道を対象とした研究を公表した⁽¹⁾。研究の方針等についてはそちらを確認されたい。本稿では、東北地方に存する関連史跡のうち、11の事例を取り上げる。

II. 東北地方に存する史跡・史実

(1) 異郷のなかの故郷⁽²⁾

陸羯南（1857-1907）、本多庸一（1849-1912）、笹森儀助（1845-1915）らを輩出した弘前市在府町に、前川國男（1905-86）の最初の仕事である「木村産業研究所」（1932）が建っている。前川は1928年に渡仏、日本人として初めてル・コルビュジエ（Le Corbusier 1887-1965）の弟子となった。自身は新潟生まれの東京育ちだが、母は旧弘前藩士の家系の出身で、渡仏に際して、母方の伯父で外相や参議院議長を歴任した佐藤尚武（1882-1971）の援助があった。1930年に帰国し、ハプスブルク帝国出身の建築家レーモンド（Antonin Raymond 1888-1976）の事務所に入所した。入所間もなく、在パリ日本大使館の武官だった同郷の先輩、木村隆三（1899-1944）からの依頼を受ける。木村は、青森の発展に尽力した実業家の木村静幽（1841-1929）の孫で、弘前に地場産業振興の拠点を作ろうと考え、前川に設計を依頼したのであった。前川はその後、晩年に建てた弘前市斎場に至るまで、8つの作品を弘前市内に残した。

1933年にナチ政権を逃れて来日したタウト（Bruno Taut 1880-1938）は1935年5月下旬に弘前を訪れ、「コルビュジエ風の新しい白亜の建物」、木村産業研究所に出会った。この時のタウトの感想の典拠としてしばしば挙げられる著書『日本美の再発見』は日記からの抜粋であり、前後の文脈は原典から詳しく知ることができる。くだんの記述は5月27日付けの記述に登場する。「私達は、ひどい**いかも**の校舎の傍を通りすぎた。私は上野君〔上野伊三郎（1892-1972）〕に向かっていった、——私達はこの旅行でまだ何かすぐれたものに出会わず見込があるだろうか。そうしたら**丁度**そのとき、町角にコルビュジエ風の新しい白亜の建物を見た、これが木村研究所である」。

建物についての記述はそれっきりで、とくに褒める言葉もない。むしろタウトは日記の別のところで、日本におけるコルビュジェ賛美の風潮や、前川の師のレーモンドに対する批判的な言葉を度々書き残している。曰く、レーモンドは「コルビュジェの模倣者、模写者であり……この国の嫌らしいコルビュジェ流行は、レーモンド氏などに主たる責^{せめ}があると言ってよい」（1935年8月5日）、彼の設計したライジング・サン石油会社は「まるで墓場の墓石のようだ」（1933年5月31日）云々。実験的住宅群ヴァイセンホーフ・ジードルング（1927）を一緒に建設したこともあるコルビュジェについては、フランスの建築雑誌に掲載された写真にギリシャ彫刻とコルビュジェ作の抽象画が並列されているのを目にして、「この優雅な彫刻作品に、コルビュジェの浅薄な抽象画を配するに至っては、沙汰の限り」としている（1935年11月4日）。

タウトは青森にも手厳しい。弘前は「どこに行ってもブリキ、ブリキ、ブリキだらけだ。こうなるともうハイカラどころではない」、町の「全体の印象は、古い日本をヨーロッパ・アメリカ風に植民地化したという感じ」、宿泊した旅館の玄関は「兵舎より少しはましだと思わせるばかり」、翌日に訪れた浅虫温泉東奥館に至っては、「日本でもいかもの最高頂」と酷評する。もっとも、弘前高校時代の太宰治（1909-46）が遊んだ花街の榎小路近くまで来ながら、「ひやりと冷たい感じのする一角にうっかり入り込んでしまった、そこには警察やら兵営やら裁判所などがあったので、急いで引返した」というのだから、緻密な観察に基づく評価とは思えない。対して、その前に周った秋田については、「秋田市は、全体として今なおすぐれた伝統的文化を保持している」、「秋田はまことに北日本の京都」と称賛し（5月26日）、翌年にも再訪している。この旅の間、刑事に尾行されて神経を擦り減らしていたのかもしれないが、タウトの口吻は不公平が過ぎる。

しかし日記を注意深く読むと、青森を貶して秋田を褒めるというよりも、「ヨーロッパ風のハイカラ文化」やアメリカ風の「モダン」の進出を手厳しく批判しているのがあって——弘前も、雪除けの雁木は「なかなか手際よく解決されていて、一種独特の趣を備えている」——、東北の自然、あるいは歴史や風土に根差していると感じた事物には北ドイツ、とくに故郷の東プロイセンを重ね合わせて心を動かしている。仙台の商工省工芸指導所に赴任して3週後の1933年12月3日に早くも、タウトは仙台の八木山からの景観を「まるで東プロシャそっくりだ」と評し、スケッチを残している。1935年の旅行では、徒歩でかなた金足村字小泉に向かう道すがら、「故郷の香りのする松のオゾンが漂っている、まるでバルト海の近くか、東プロイセンの国境地方にでもいるような気がした」と、また追分駅から弘前への汽車の車窓を「北ドイツの平野に似た風景」と記している。さらに、秋田の農民を「この家の主人は精悍な整った顔立をしていて、フリースランド人そっくりである」（5月26日）と、夕食に出た小さな魚については「これは東プロイセンのキウリウオと同じものだと思う」（5月24日）と述べ、住人の風貌や食文化にも祖国の面影を見出している。

1936年の秋田再訪の際も、羽越線の車窓を「砂丘、防雪林、それから碧い海、まるで東プロイセンの海そっくりだ。海中の岩に打ち寄せては雪のように白い飛沫をあげる波、実にすばらしい観物だ」と称賛した（2月11日）。離日が近づくとつれて日本に対する不安と不信を深めていったタウトは、故郷を思い出させる東北に心を慰めていたのではないか。

タウトと前川にはもう一つの微細な接点がある。前川は、美術蒐集家フィッシャー夫妻（Adolf Fischer 1856-1914、Frieda Fischer-Wieruszowski 1874-1945）のコレクションを所蔵するケルン市立東洋美術館を設計しているが、ケルンは、1914年のドイツ工作連盟展覧会でタウトが「ガラスの家」を出展し、建築家として一躍脚光を浴びた町である。なお、この展覧会の誘致と35万m²の会場の用意に尽力した当時の副市長は、自身もドイツ工作連盟の会員だったアデナウアー（Konrad Adenauer 1876-1967）であった。

（2）秋田に来た異人たち⁽³⁾

鉱山県である秋田、そして日本の鉱工業の近代化にはドイツが深く関わっている。1765年に創設されたフライベルク鉱山学校（工科大学）はスロヴァキアのバンスカー・シュチャヴニツァ（シェムニツ）の鉱山学校（1735）に次ぐ歴史をもち、岩佐巖（1852-99）、栗本廉（1854-92）、安東清人（1854-86）、野呂景義（1854-1923）、渡辺渡（1857-1919）、巖谷立太郎（1857-91）、大島道太郎（1860-1921）、原田豊吉（1861-94）、渡辺芳太郎（1866-1923）、今泉嘉一郎（1867-1941）、俵国一（1872-1958）、井上匡四郎（1876-1959）、加藤武夫（1883-1949）等のパイオニアが留学している。また、各国から来日したお雇い外国人にもフライベルクで学んだ者——ライマン（Benjamin S. Lyman 1835-1920、米）、パンペリー（Raphael W. Pumpelly 1837-1922、米）、ミルン（John Milne 1850-1913、英）——が少なくない。さらには、A・v・フンボルト（Alexander v. Humboldt 1769-1859）やノヴァーリス（Novalis 1772-1801）も同校に在籍した。

秋田の鉱山に来たドイツ人では、ネッター（Curt A. Netto 1847-1909）の名が知られている。フライベルクの鉱山監督の子として生まれたネッターは、地元の鉱山学校を卒業し、技師として勤務していたが、日本の工部省に招聘され、1873年11月から1877年10月まで小坂鉱山で働いた。実収率の低いイギリス式分銀炉をドイツのマンスフェルト式溶鉱炉に替え、日本で初めて湿式製錬法を採用する等、銅製錬技術の向上に努めた。その後、東大理学部採鉱冶金学教師となり、野呂や渡辺渡を育成した。1885年に帰国してからは、クルップ社やメタルゲゼルシャフト社で指導的な立場に就いた。

ネッターは多才な人で、交友関係も広がった。医学者バルツ（Erwin v. Bälz 1849-1913）、窯業等に功績を残したヴァーゲナー（Gottfried Wagener 1831-92）らと交わり、「君が代」の編曲や「大韓帝国愛国歌」の作曲を行ったエッケルト（Franz Eckert 1852-1916）とは東京合唱協会と一緒に創設し、「君が代」の楽譜に表紙絵を提供した。ネッターは浮世絵や庶民文化にも興味

をもち、帰国後には、日本の庶民生活を描いた『日本の紙の蝶々』(1888)や、ヴァーグナーとの共著『日本のユーモア』(1901)を執筆している。持ち帰った浮世絵は、東京時代の友人バイア(Martin M. Bair 1841-1904)の義弟・従兄にあたる美術商ビング(Samuel (Siegfried) Bing 1838-1905)に売却した。ビングはハンブルクに生まれ育ったユダヤ人で、パリで日本の美術品を扱う店を開いて成功し、ゴッホ(Vincent W. van Gogh 1853-90)に浮世絵を知るきっかけを与え、またアール・ヌーヴォーの流行を牽引した人物である。ビングを介して、ネットーは間接的に世紀末のヨーロッパ芸術の爛熟にも貢献したと言えよう。

秋田に招かれたドイツ人技師としては他に、院内銀山で1881~83年に指導にあたったバンザ(Christian Bansa 生没年不詳)とレージング(Bernhard Rösing 1855-1933)がいる。東京の聖徳記念絵画館に展示されている「山形秋田巡幸鉱山御覧」には、1881年9月21日、明治天皇が東北巡幸の道中で院内銀山の五番坑に入坑した時の光景が描かれているが、画中のカンテラは、バンザがドイツ製のビスケットの空き缶で作ったものとされる。この日は今も全国鉱山記念日に指定されている。

さらに、メツガー(Adolph Mezger ?-1899)は1878~82年に阿仁鉱山で勤務した。彼はその後1年間、ネットーの代理として東大理学部で採鉱冶金学を教え、1882年夏には、岡山県成羽の三菱商会吉岡銅山の整備にも関与している。

近代日本の鉱工業の発展とそれを支えた外国人たちの歴史には、お雇い技師の活躍という陽の面だけでなく陰の面もある。秋田に限定すれば、例えば1944年5月29日には落盤事故で朝鮮人と日本人計22人が犠牲となった七ツ館事件が、翌年6月30日には中国人労務者の蜂起に対する弾圧で400人以上が死亡した花岡事件が発生している。徴用工訴訟問題に示されるように、日本産業史における過去の克服は達成されていない。

(3) 三陸沖の「オランダ」⁽⁴⁾

三陸海岸沿いの岩手県山田町に、「オランダ島」と呼ばれる無人島がある。1643年にオランダ東インド会社のプレスケンス号が来航したことから、この名がつけられた。オランダ(ネーデルラント連邦共和国)は1648年のミュンスター条約で正式に独立を認められるまで、国際法上は神聖ローマ帝国に属している。したがって、初期の日蘭交渉は広義の日独関係史の一部でもある。なお、多国籍企業だったオランダ東インド会社の従業員の三分の一はオランダ以外の出身者であり、来日ドイツ人では、シーボルト(Philipp F. v. Sieboldt 1796-1866)やケンペル(Engelbert Kämpfer 1651-1716)をはじめ、ホーライター(Michael Hohreiter 1591-?)、ブラウン(Hans W. Braun 1609-?)、ハルツィング(Karl Hartzing 1611-?)、ヴァーグナー(Zacharias Wagner 1614-68)、シャムベルガー(Caspar Schamberger 1623-1706)、クライアー(Andreas Cleyer 1634-97/98)等が知られる。

1643年2月3日、オランダ東インド総督の命を受け、北緯37度半、日本の東方海上にある伝説の金銀島を発見するための第2回探検隊が組織され（1回目は1639年）、カストリクム号、プレスケンス号がバタビアを出帆した。しかし北緯34度付近で暴風雨に遭い、両船は離れ離れになってしまう。カストリクム号はカムチャツカ半島の南東沖まで航行し、途中で択捉島と得撫島を発見して領有を宣言した。一方、プレスケンス号は5月29日に日本沿岸に到着し、6月10日に水の補給のために陸奥国山田浦に寄港して村人の歓待を受けた。しかしこの話を知った役人は、一行が入国を禁じられていたポルトガル人ではないかと危惧し、7月28日に再度入港して飲料水や食糧を買うために上陸した乗組員10名を饗応し、隙を見計らって捕縛した。

船長スハーフ（H. Cornelisz Schaep 1611-47）たちは盛岡城、次いで江戸に護送され、連日の取り調べを受けた。この頃、筑前の梶目大島にポルトガル船が来航してイエズス会宣教師ら10名が上陸する事件があり、また1641年にオランダとポルトガルが10年間の和約を結んでいたため——もともと、この和約はヨーロッパ内に効力を限定されており、アジアやブラジルをめぐる両国の争いは続いていた——、スハーフたちはこの件への関与が疑われたのであった。スハーフの日記には、同時期に江戸で尋問を受け、壮絶な拷問の末に転びバテレンとなったイエズス会士の様子が記録されているが、そのうちの一人キアラ（Giuseppe Chiara 1602-85）は、遠藤周作（1923-96）の『沈黙』の主人公、セバスチャン・ロドリゴのモデルである。

出島のオランダ商館長たちが例年より一か月早く参府して、プレスケンス号に布教や領土獲得の意図がないことを釈明し、12月8日に同船の乗組員は釈放された。幕府はこの措置を将軍家光（1604-51）の温情によるものと考えており、その後、オランダ商館長が参府する度に返礼を期待していたが、オランダ側にそうした理解はなかった。しびれを切らした幕府は1648年に商館長の将軍への拝謁を拒否し、さらに翌年には参府そのものを禁じた。これに驚いたオランダ東インド会社はバタヴィアから江戸に謝礼のための特使を派遣し、翌年から日蘭関係は回復した。この時の使節団には、「カスバル流外科」の祖となったドイツ人医師シャムベルガーが随行しているが、彼については別稿で論じる。

オランダ島のある山田町は東日本大震災（2011）で大きな被害を受けたが、過去にも明治三陸地震（1896）、昭和三陸地震（1933）等、再三にわたって地震と津波に直面している。プレスケンス号事件の30年程前に、津波が「山田浦房ヶ沢マデ、織笠村霊堂マデ来襲人死数知レズ」（児島大梅『梅莊見聞録』）という惨事をもたらした慶長三陸地震（1611）については、初めて金銀島探索を行ったスペイン人探検家ビスカイノ（Sebastián Vizcaíno 1548-1624）が記録を残している。江戸や長崎から遠く離れた海も、日独・日欧の交流の舞台だったことの一証左である。

（4）水沢の日独交流史⁽⁵⁾

1860年10月15日、通商条約締結の交渉相手だったプロイセン・オイレンブルク使節団から朝食

に招待された外国奉行の堀利熙（1818-60）と通詞の森山多吉郎（1820-71）は、使節団のメンバーにマックス・フォン・ブランド（Maximilian A. S. v. Brandt 1835-1920）の名があるのを知り、声を揃えて、この人物が有名な作戦学の書の著者と関係しているのかどうかを尋ねた。マックスがその息子であることを知った二人は、心から喜んだ様子だったという。後にプロイセン駐日代理公使、ドイツ帝国全権公使となるマックスの父で、有名な作戦学の書の著者とは、フランクフルト国民議会にも選出されたプロイセン軍人、ハインリヒ（Heinrich v. Brandt 1789-1868）のことで、彼の著作を『三兵答古知幾』の題でオランダ語版から和訳したのは、高野長英（1804-50）である。

水沢出身の長英は1820年からシーボルトの鳴滝塾に通い、塾頭となった。蛮社の獄（1839）で入牢したが1844年に脱獄し、田原藩医鈴木春山（1801-46）の庇護を受けて江戸市中に潜伏、春山の没後にその遺志を継いで、1847年に全27巻の訳業を完成した。この仕事により、歩兵、騎兵、砲兵を組み合わせたヨーロッパ式の三兵戦術が日本に初めて紹介されることとなった。堀利熙は12月4日にプロイセン使節団を再訪し、訳書の一部をマックスに贈った。その数日後の12月17日、ドイツ諸邦三十数か国との条約締結という見通しに幕府の担当者たちが混乱するさなか、堀は突然の切腹を遂げる。日普修好通商条約は一か月後の1861年1月24日に締結された。ベルリン国立図書館には、堀の署名が入った『三兵答古知幾』の包紙が残されている。

高野長英の親戚にあたり、同じく水沢で生まれ育った後藤新平（1857-1929）の生涯には、さらに深いドイツとの関わりを見い出せる。後藤は1876年8月に愛知県医学校で医者としてキャリアを開始した。同校で、(6)で扱うオーストリア人医師ローレツの指導を受け、ローレツが金沢に移ると1880年5月に校長心得、翌年10月には改称された愛知病院院長、愛知医学校校長となって、前任者の残したカリキュラムの充実に尽くした。その後は内務省衛生局に転じ、1890年4月～1892年6月にドイツに私費留学して、ミュンヘン大学のペッテンコーファー（Max J. v. Pettenkofer 1818-1901）のもとで博士号を得た。

後藤は渡独前からビスマルク（Otto v. Bismarck-Schönhausen 1815-98）に私淑し、とくに外交政策と社会政策に関して終生ビスマルクから多くを学んだ。留学生活をともにした岡田国太郎（1861-1945）は、本人から聞いた話として、後藤がベルリン・シュテティン駅で、そしてフリードリヒスルーの別荘でビスマルクと面会したと伝えている。後藤自身がこの体験を家族にも話していないこともあり、怪しげな証言だが、後藤のビスマルク崇拝が窺えるエピソードである。さらに岡田によれば、後藤と岡田、そして北里柴三郎（1853-1931）の3人はポツダムの宮殿庭園でヴィルヘルム二世（Wilhelm II. 1859-1941）に偶然会ったこともあり、ドイツ語が達者で皇帝にも名を知られていた北里が会話を交わしたという。

満鉄総裁だった1907年9月、後藤は韓国統監の伊藤博文（1841-1909）と厳島で会談し、いわゆる「新旧大陸対峙論」を開陳した。シャルク（Emil Schalk 1834-1901）の独仏同盟論に着想を

得たこの構想は、アメリカの覇権に対抗すべく日欧露中が提携する必要を説いたもので、この案の実現を託した伊藤が死去した後も後藤は日中ソ提携論を模索し続け、また日独の文化・学術交流にも尽力した⁽⁶⁾。

1917年11月、後藤は山縣有朋（1838-1922）から28巻美濃紙2000枚に及ぶ「比斯馬克公演説集」と題した原稿を譲り受けた。シュタイン（Lorenz v. Stein 1815-90）に学んだ法学者の有賀長雄（1860-1921）、レースラー（Hermann Roesler 1834-94）の通訳を務めた花房直三郎（1857-1921）、ドイツ語学者の澤井要一（1866-1934）ら7名によって30年前に作成されたこの翻訳稿の価値を認めた後藤は、自ら監修者となり、3巻からなる非売品の『ビスマルク演説集』として刊行した（1919）。各巻の冒頭に後藤、坪井九馬三（1859-1936）、清浦奎吾（1850-1942）が序文を寄せている。なお、後藤は晩年にもブラウアー（Arthur v. Brauer 1845-1926）の『ビスマルク公外交機略』を翻訳させて自ら序文を書いており（1924）、ビスマルクへの変わらぬ傾倒ぶりを示している。

さらに後藤の周辺では、義理の姪婿の平野義太郎（1897-1980）や佐野碩（1905-66）が1930年前後にドイツに留学し、国崎定洞（1894-1937）らの日本人共産党グループと交流している。また、長英、後藤とともに「水沢の三偉人」と称される斎藤実（1858-1936）にもジーマンス事件との関わりがあるが、彼らについては稿を改めて論じる予定である。

(5) ウィーン学派と地方都市⁽⁷⁾

1878年に完成なった木造三層樓の済生館病院本館の建築を指揮したのは、山形県令の三島通庸（1835-88）である。三島は前年に山形県公立病院委員長の長谷川元良（1835-96）の治療を受けて肺炎から全治しており、そのことが、三島をして県内の医療従事者の声に耳を傾けさせ、地域医療の拡充に向かわせた理由の一つだったと考えられる。

1880年9月28日～1882年7月26日に済生館医学寮教頭を務めたローレツ（Albrecht v. Roretz 1846-84）は、軍医の長男としてウィーンに生まれた。ウィーン大学医学部を卒業し、1873年1月8日からニーダーエスタライヒ州立精神病院に勤務するも、翌年7月4日に辞表を提出し、東アジア弁理公使だった伯父のシェッファー（Ignaz R. v. Schäffer）に同行して、11月26日に公使館付医官として来日した。西日本を巡る長期旅行、横浜外国人居留地での開業を経て、愛知県公立病院医学講習所（1876～80）に赴任し、通訳の司馬凌海（1839-79）や後藤新平を指導した。その後、短期間を金沢医学校（1880年4～8月）で過ごしてから、山形を訪れた。帰国後はウィーン郊外ウンタージーフェリングのサナトリウムの院長となり、1884年3月に結婚するも、同年7月20日に37歳で病没した。

名古屋や山形でのローレツの功績、済生館病院の歩み等については、日頃の調査に基づく詳細な研究がある。しかし、来日までのローレツの前半生にはなおも検討の余地がある。例えば、ローレツの母あるいは妻を「ボヘミアの皇女」とする説明が散見されるが、これは疑わしい。ま

たローレツの学生時代の履修科目や成績が詳しく分かっているが、ギムナジウムから大学へと進学する間の1866年6～10月の動向は不明である。この時期が無視できないのは、彼がクレムジールのギムナジウムを卒業する2日前の6月7日にプロイセン軍がオーストリア管理下のホルシュタインに侵攻し、14日に普墺戦争が始まっているからである。7月3日にケーニヒグレーツで大勝したプロイセン軍は同月半ばにドナウ川流域まで南進し、その一部がローレツのいたクレムジール近傍を通過している。ローレツは戦争を身近に経験した可能性が高く、戦争体験、敗戦後の自国の変化が彼の人生に及ぼした影響等はこんご追究されるべきである。

医学の徒としてローレツが過ごした環境も興味深い。彼がウィーン大学で授業を受けたブリュッケ (Ernst W. Brücke 1819-92) は、1873年にウィーン大学に入学したフロイト (Sigmund Freud 1856-1939) の指導教員であった。また、ローレツが短期間勤務した州立精神病院には、ノーベル生理学・医学賞受賞者 (1927年) のヴァーグナー＝ヤウレック (Julius Wagner-Jauregg 1857-1940) が1883～87年に在籍している。明治の地方都市の医療は、ローレツのような人物をつうじて世界の最先端の医学と繋がっていたと言えよう。

(6) もう一つの社会史の系譜⁽⁸⁾

歴史学者の三浦新七 (1877-1947) の一族は江戸後期に紅花で財を成し、明治になって三島通庸の求めに応じて銀行業に進出した名家であった。三浦新七は山形中学を経て東京の高等商業学校に進み、卒業と同時に同校の講師となった。中学の同窓に、蔵相・日銀総裁・日本商工会議所会頭等を歴任した結城豊太郎 (1877-1951)、国際連盟事務局次長等を務めた奥山清治 (1876-1965)、倫理学者の藤井健治郎 (1872-1931)、教育学者の吉田熊次 (1874-1964)、農学者の伊藤清蔵 (1875-1941)、物理学者の日下部四郎太 (1875-1924)、漢学者の塩谷温 (1878-1962) 等がおり、いずれも長く親交が続いた。

1903年3月から1912年1月まで、ライプツィヒ大学、ミュンヘン大学、ベルリン大学、そして再びライプツィヒ大学で学んだ。留学の当初の目的は商学研究だったが、ライプツィヒで社会史・文化史の大家ランプレヒト (Karl Lamprecht 1856-1915) の講義を受け、その勧めでミュンヘンに移って新歴史学派のブレンターノ (Lujo Brentano 1844-1931) に師事し、研究テーマは歴史学へと傾いていった。このミュンヘン時代には、ランプレヒトの弟子ウェデマイヤー (André Wedemeyer 1875-1958) とともに大宝律令の独訳にも取り組んでいる。三浦は再度ライプツィヒに戻るとランプレヒトのもとで本格的に学び、1910年には師の演習助手を務めた。この間に官費留学の期間が終了したが、私費留学に切り替えてさらに6年間、なかなか帰国しないことに業を煮やした家族が兄の死を告げる嘘報を送るまで、ドイツに滞在した。

帰国後は母校の教授として経済史、文明史を教えていたが、金融恐慌が起こった1927年に教職を辞し、家業である両羽銀行の経営に尽力することとなる。山形では、銀行業のかたわらで山形

県郷土研究会を主宰したり、山形中学で文明史の講演を行う等、歴史研究と教育も続けた。1935年、白票事件のさなかに東京商大に復帰、翌年まで学長を務める。その後は貴族院議員、帝国学士院会員、日本銀行顧問・参与、山形県商工経済会会頭等に就任した。

実業や大学運営に手腕を求められた三浦は多作な学者ではなかったが、四十篇程の論文で洋の東西の古代から近代までを、経済、社会構造、思想、文化、心理、国民性といった様々な観点から論じ、村松恒一郎（1898-1984）、町田實秀（1898-1971）、上原専禄（1899-1975）、笠信太郎（1900-67）、増田四郎（1908-97）、増淵龍夫（1916-83）等、多数の後進を残した。三浦の学問を継承して独自の歴史学を展開し、自身も今野国雄（1923-2001）、渡辺金一（1924-2011）、弓削達（1924-2006）、阿部謹也（1935-2006）らを育てた上原は、三浦を「ランプレヒト史学を起点としながらそれを超出して……類稀な独自の文化史学を創り出した」歴史学者と評している。三浦は一橋史学の先達ということとどまらず、アナール派を源とする流れとは別の、もう一つの社会史研究、文化史研究、文明論の系譜の原点に位置づけられるべき歴史家である。

(7) 斎藤茂吉のみたミュンヘン一揆⁽⁹⁾

山形県南村山郡金瓶村（現在の上山市金瓶）に生まれた斎藤茂吉（1882-1953）は、1921～25年に精神医学の研究のために渡欧し、最初はウィーン大学に、続いてミュンヘン大学で学んだ。1923年7月19日にミュンヘンに移った茂吉は、居所も定まらず慣れない新生活に苦勞している時に、実父の逝去や関東大震災の知らせを受け、また激しいインフレ状態にも煩わされ、神経衰弱気味になっていた。10月11日にはミュンヘン来訪の最大の目的であったクレペリン教授（Emil Kraepelin 1856-1926）との際会を果たすが、挨拶を無視されたうえ握手も拒否され、屈辱を感じている。

ミュンヘンに初雪が降った11月8日木曜日、茂吉はヒトラー（Adolf Hitler 1889-1945）の一揆に遭遇した。この日の午後8時半、ビュルガーブロイケラーにゲーリング（Hermann Göring 1893-1946）率いる突撃隊が突入した頃、茂吉は精神病学会の講演を聞いていた。緊張が市内各地に広がりつつあった11時20分に終会となり、茂吉は帰路の途上、停車場前の広場が群衆で一杯になっているのを目撃する。下宿に着いた後も犬の遠吠えや隊伍の歌う行進曲を耳にし、12時を過ぎて就寝した。翌9日の茂吉は終日大学に出ているが、この日の12時半、オデオン広場において蜂起側と警官隊の銃撃戦が発生した。昼食の際、同席した「日本参謀本部附のK少佐」から事件の概要を聞き、戒厳令下の夜間、オデオン広場の様子を確認しながら帰宅している。数日後に十冊ほどの書籍を購入して事件について勉強したという茂吉は、書簡や短歌（『遍歴』（1948年））、そして後年の短文「ヒットレル事件」（1935年）のなかで体験を語っている。

ミュンヘン一揆の時期は南原繁（1889-1974）、三木清（1897-1945）、羽仁五郎（1901-83）、九鬼周造（1888-1941）等もドイツに滞在しており、茂吉と同じ山形の出身では、石原莞爾（1889-

1949)が陸軍大学校教官としてベルリン・ポツダムに留学中であった。なお、留学中の茂吉が世話になり、11月9日に手紙を送った前田茂三郎(1897-?)は、ヴェルサイユ条約締結後に連合国が設置した対独陸軍監督事務所の日本委員会で情報活動を担当しており、石原も同委員会を訪れている。石原は妻に宛てて毎日手紙を書いて日々の暮らしを詳しく伝えており、下宿の家主「婆サン」と奉公人「ちんくしゃ君」を相手に孤軍奮闘する姿や、関東大震災の惨状を知り「国家ノ前途ヲ思フテ数夜泣キ明シタ」のに、震災三か月後になってようやく手紙をよこした妻に、「精神状態ヲ、大改造スル必要アリト信ズ」と憤慨する様に、ユーモアを感じる。

激しいインフレや頻発するスト、「人心動揺ノ風」を見て「欧州ハ更ニ第二ノ大戦起ル心配頗ル大ナリ」(8月12日)と危惧し、9月末には戒厳下の生活を体験した石原だが、ミュンヘン一揆についての記述はない。この頃の石原の気持ちは関東大震災や甘粕正彦(1891-1945)の公判、11月3日に創設されたばかりの立憲養正会、そして妻と家族のこと等で、ドイツ人の参謀中佐の個人教授を毎週受けていたものの、この軍人から時局を聞き出そうとした気配もない。石原は後年、主著『最終戦争論』(1940)の構想はこの留学中にかたちづくられたと述べている。ドイツの荒廃を目撃して第二次世界大戦を予感した石原のヒトラーの出現に対する無関心は、同じ山形出身で同じ時に渡独し、人脈のうえでも無関係ではなかった茂吉と対照的に見える。しかし、その後の思索、創作にドイツ留学が影を落としている点で二人は共通している。

(8)「東北の月沈原」を訪ねた学者たち⁽¹⁰⁾

1922年11~12月に来日して各地で講演したアインシュタイン(Albert Einstein 1879-1955)は、12月2日に仙台を訪れ、身の危険を感じるほどの群衆の歓迎を受け、翌日は午前中に仙台公会堂で講演、午後には松島を見物した後、仙台に戻って東北帝国大学を訪問し、歓迎の晩餐会に出席した。この席で八木秀次(1886-1976)らの求めに応じて会場の壁に記したサインは1926年に焼失してしまったが、残された写真には、アインシュタインの筆跡よりも大きな、同大生物学科教授のモーリッシュ(Hans Molisch 1856-1937)のサインが確認できる。

幼少時に郷里のブリュンでメンデル(Gregor J. Mendel 1822-84)に接した体験をもつ植物学者モーリッシュは、グラーツ工科大学、プラハ大学、ウィーン大学で教鞭を執り、1922~25年に東北帝国大学に招聘された。晩餐会の写真では、アインシュタインと小川正孝(1865-1930)総長の間に座っている。「モーリッシュ反応」や「アレロパシー(多感作用)」の語の提唱によって知られるモーリッシュは、帰国後はウィーン大学総長(1926-27)やオーストリア科学アカデミー副総裁(1931-37)の任に就いたが、総長時代に反ユダヤ主義、ナチズムを標榜する学生を擁護し、大学を左派の暴力から守るというよりも右派の暴力に加担したことが近年に指摘されている⁽¹¹⁾。東北大学構内には、離日の際に彼が植えた5本の杉のうち2本が残っている。

モーリッシュと重なる時期(1924-1929)に東北帝国大学で教えたヘリゲル(Eugen Herrigel

1884-1955) は、来日以前から三木清や羽仁五郎と交流があった新カント派の哲学者で、ドイツ神秘主義研究の延長として日本の文化・精神の探求に向かい、妻とともに阿波研造(1880-1939)に弓術を学んで五段に達した。帰国してエアランゲン大学に職を得て、1936年の講演を邦訳した『弓と禅』等、日本に関する多数の著作を書いた一方、1938年にナチ党に入党した(党員証の交付は1937年12月5日)。大学副学長(1938-44)、学長(1944-45)を歴任するも、戦後は失職してアメリカ占領地区から追放処分を受けた。ヘリゲルをめぐっては、日本文化や禅文化の紹介者、探求者として好意的に評価する見方がある一方、彼の日本論に潜むオリエンタリズムや、弓道や禅の精神をゲルマン主義に結びつけようとしたことへの批判、さらには40歳を過ぎてからの週一回、三年程度の修行で弓道を語ることへの懐疑の声もある。しかし、何より看過できないのは、戦後のヘリゲルがナチ党への関与について明らかに事実と反する弁明をしている点であり、ここには思想と実践の両面で日本を追究した求道者の印象はない。

1936年には、二人のユダヤ系ドイツ人が仙台を訪れている。一人は哲学者レーヴィット(Karl Löwith 1897-1973)である。ハイデガーの弟子だったレーヴィットはナチ体制下で職を奪われ、九鬼周造の力添えで東北帝国大学の教授となった。しかし1941年、枢軸国の一角を成す日本での生活も窮屈となり、アメリカに渡った。1940年に仙台で執筆した『ナチズムと私の生活』(原題は『1933年前後のドイツでのわが暮らし—ある報告』)には、日本におけるドイツ人コミュニティの様子が描かれている。

もう一人のジンガー(Kurt Singer 1886-1962)は、ハンブルク大学の員外教授として来日し、1931~35年に東京帝国大学経済学部で教壇に立った経済学者・哲学者で、ナチの政権獲得によって祖国での地位を失い、東大の任期終了後は仙台二高に移ってドイツ語を教えた。レーヴィットと同様の理由から1939年8月にオーストラリアに移住し、1957年によくドイツに戻った。しかし既にドイツに居場所は残っておらず、スイス、イタリアを経て、アテネで生涯を終えた。日本を発つ年に古典を集めた“The Life of Ancient Japan”を岩波書店から発表し、死後の1973年には英文の日本論『鏡・剣・勾玉』が刊行されている。ジンガーの日本人観はヘリゲルよりも冷静で、複眼的である。

(9) 世界一周した日本人とバルト・ドイツ人⁽¹²⁾

仙台藩の御用米と御用木を江戸に運ぶ千石船、若宮丸は1793年11月27日に石巻湊を出港したが、暴風に遭って福島県双葉郡広野町沖で遭難した。1794年5月10日、乗組員16名はアリューシャン列島のアンドレヤノフスキエ諸島中のアツカ島に漂着し、ロシア人に助けられて、1796年にイルクーツクに辿り着いた。同年7月、西欧がフランス革命戦争に翻弄しているさなかに極東へ進出しようともくろむロシアのエカチェリーナ二世(Yekaterina II 1729-96)は、漂流民を日本に送還して通商関係樹立の糸口とするよう、現地の総督に命じた。しかし、イルクーツクの商人たち

の内紛、皇帝の死去によって計画は頓挫し、漂流民たちがペテルブルクでアレクサンドル一世 (Aleksandr I 1777-1825) に拝謁し帰国を認められたのは、ようやく1803年6月22日のことであった。

翌月、遣日使節レザノフ (Nikolai P. Rezanov 1764-1807) と若宮丸漂流民4名を乗せたナデジダ号はペテルブルク西方沖合のクロンシタットを出港し、大西洋を渡って南米大陸を迂回した後に太平洋を横断し、1804年9月に長崎に到着した。レザノフの通商交渉が不調に終わったのは周知のとおりだが、ナデジダ号は喜望峯経由で1806年8月に母港に帰還し、ロシア初の世界周航を成し遂げた。他方、世界一周を果たした最初の日本人となった4名は1806年2月によりやく帰郷が叶った。

この若宮丸事件は日露関係史の文脈において語られるのが常だが、ナデジダ号の航海は「ドイツ」と無縁ではない。長崎を来訪した同船の乗組員は81名 (若宮丸漂流民を除く)、上級の乗組員と使節団員は20名程だが、そのうち、船長のクルーゼンシュテルン (Adam J. v. Krusenstern 1770-1846)、副官のレーヴェンシュテルン (Ludwig v. Löwenstern 1748-1815) とベリングスハウゼン (Fabian G. v. Bellingshausen 1778-1852)、第一艦医のエスペンベルク (Karl Espenberg 1761-1822)、士官候補生のコツェブー兄弟 (Otto v. Kotzebue 1787-1846、Moritz v. Kotzebue 1789-1861) は、いずれもバルト・ドイツ人だからである。また、使節団員のティレジウス (Wilhelm G. Tilesius v. Tilenau 1769-1857) とラングスドルフ (Georg H. v. Langsdorff 1774-1852) はドイツ人の博物学者、ホルナー (Johann C. Horner 1774-1834) はスイス人の天文学者である。彼らのなかでも、探検家を多数輩出したクルーゼンシュテルン家の縁戚で、著名な文筆家アウグスト (August v. Kotzebue 1761-1819) を父にもつオットー・フォン・コツェブーは、1815~18年にロシアの2度目の世界一周航海を行ったリューリク探検隊の指揮官となるが、この時はバルト・ドイツ人の博物学者エシュショルツ (Johann Fr. Eschscholtz 1793-1831) やドイツ出自の画家ヒョリス (Ludwig Y. Choris 1795-1828) の他、詩人のシャミッソー (Adelbert v. Chamisso 1781-1838) が同行している (ただしシャミッソーはフランス出身)。

ノルウェーのハンメルフェストからウクライナのスタラ・ネクラシウカまでの2800キロに及ぶ世界遺産、シュトルーヴェの測地弧に象徴されるように、バルト・ドイツ人には地理学、天文学、植物学、極地探検等に関わって世界各地に功績を残した人物が多く、日本との関係でいえば、須川長之助 (1842-1925) を伴って北海道や岩手で採集旅行を行い、牧野富太郎 (1862-1957) とも交流のあった植物学者マキシモヴィッチ (Carl J. Maximowicz 1827-91) がいる。

(10) 生きながらえた学徒たち⁽¹³⁾

会津藩の藩校、日新館は多くの人材を輩出したが、ドイツとの関わりでは、まず山本覚馬 (1828-92) の名が挙がる。藩の砲術指南役を務める一族に生まれた覚馬は、日新館を出てから佐

久間象山（1811-64）や江川太郎左衛門（1801-55）に学び、1856年に母校に戻って蘭学所を開き、指導にあたった。1862年に藩主松平容保（1836-93）に従って京都に移り、禁門の変（1864）で功を成すも視力を失った。戊辰戦争に向けて緊張が高まる1866年12月頃、覚馬は長崎でドイツ人商人レーマン（Carl W. H. Lehmann 1831-74）と接触し、会津・紀州・桑名各藩のために銃器購入の交渉をしている。会津藩のドイツとの交渉は1868年11月6日に維新軍に降伏するまで続く⁽¹⁴⁾。敗北後の覚馬は京都府庁に出仕し、レーマンの協力も得つつ府政の発展に尽くした。実妹の八重（1845-1932）の夫、新島襄（1843-90）の同志社英学校開校（1875）に協力したことはよく知られている。

日新館で覚馬に学んだ小松済治（1848-93）は18歳で長崎に遊学し、レーマンにドイツ語を学んだ。レーマンが覚馬たちの依頼に応えるためにドイツに一時帰国すると藩命を受けてこれに同行し、1868年10月21日にハイデルベルク大学で学籍登録して医学を学んだ。かつて、日本人として最初にドイツの大学に学籍登録されたのは、福岡藩出身で後に仙台で医師として活動した赤星研造（1844-1904）と言われていたが（1870年5月5日に同大医学部に学籍登録）、荒木康彦の研究によって、小松が先にハイデルベルクで学んでいたことが明らかにされた⁽¹⁵⁾。既に会津藩が消滅した1870年に帰国した小松は紀州藩に移り、その後は兵部省、司法省等に勤めた。その間、岩倉使節団に三等書記官として随行しており、また1883年には、グナイスト（Rudolf v. Gneist 1816-95）の著作として初めての邦訳となる『建国説』を出版している。

板東俘虜収容所長（1917-20）、若松市長（1922-25）を務めた松江豊寿（1872-1956）も日新館の出身である。映画『バルトの楽園』（2006）の主役である松江は、賊軍の汚名を着せられた体験から、ドイツ人捕虜に対して人道的に接したと言われる。

さらに東海散士（柴四朗、1853-1922）も同門である。少年時代にプロイセン商人シュネル（J. Heinrich Schnell 1843?-71?）のカリフォルニアへの移民計画（若松コロニー）に参加しようとしたこともある彼は、世界各地の亡国の志士たちを主人公にした小説『佳人之奇遇』（1884-87）を書き、作中に登場させたウラービー（عربي أحمد 1841-1911）やコシュート（Kossuth Lajos 1802-94）とも実際に会っている。覚馬や小松、松江、あるいはウラービーやコシュートと同様、敗北の体験を再出発点として次の時代を生きた人物である。

（11）戦士たちの丘⁽¹⁶⁾

白虎隊自刃の地とされる飯盛山に、「ローマ市寄贈の碑」が建っている。ポンペイの遺跡から発掘された石柱に青銅製の鷲を載せた高さ8メートルの碑で、表面には「SPQR 文明の母たるローマは白虎隊勇士の遺烈に、不朽の敬意を捧げんが為め、古代ローマの権威を表わすファシスタ党章の鉞を飾り永遠偉大の証たる千年の古石柱を贈る」、背面に「SPQR 武士道の精華に捧ぐ」と刻まれている。1928年12月1日、高松宮宜仁親王（1905-87）、駐日イタリア大使、近衛文麿

(1891-1945)らの参列で除幕式が行われ、当初は青銅のまさかり鉞と結んだ柴の飾り、すなわちファシズムのシンボルがあしらわれていたが、第二次世界大戦後にGHQによって撤去された。この時に碑文も削り取られ、1985年に復元された。

この碑の建立の仕掛人となったのは、イタリア・ファシズムを日本に紹介した詩人・教育者にして政治活動家の下位春吉(1883-1954)である。下位は1915年にナポリの国立東洋学院に招聘されており、クローチェ(Benedetto Croce 1866-1952)やダンヌンツィオ(Gabriele D'Annunzio 1863-1938)、そしてムッソリーニ(Benito A. A. Mussolini 1883-1945)とも交流があった。1925年初め、講演で若松市を訪れた下位は市長に対して、「伊少年隊」が会津白虎隊の事績に感激し、ムッソリーニの名で記念碑を建てたいと申し出ていると告げた。これは下位の虚言だったが、市長は真に受けて準備を進めた。地元住民の間に碑の贈呈への期待が広がり、外相の幣原喜重郎(1872-1951)や、会津藩出身で東京帝大総長等を務めた物理学者、山川健次郎(1854-1931)からの賛助があったために、引くに引けなくなった日本外務省がイタリア側に依頼して、ファシズムと白虎隊の共存が実現した。

この記念碑のそばに、もっと控えめな碑がある。独文で「一人のドイツ人 会津の若き武士たちに 1935年」と記されたこの碑を建てたのは、ナチ体制成立の前後の時期に駐日ドイツ大使館書記官の任にあり、第二次大戦後はカナダやイギリスで西ドイツ大使を務めたエッツドルフ(Hasso v. Etzdorf 1900-89)である。プロイセンの高官の家に生まれたエッツドルフは国家人民党や鉄兜団に属した経験があり、1928年にドイツ外務省に入省、1931年6月に日本に赴任した。この年、ドイツ史上二番目の女性パイロットであった従妹のマルガ(Margarete v. Etzdorf 1907-33)がベルリンから東京への単独飛行に成功し、大きな話題となっている。1933年4月末にナチ党に入党したエッツドルフは白虎隊の物語に感動し、顕彰碑の建立を決意して自腹で50円を払った。ナチ党の東京支部は1934年4月、ドイツがなお経済的に困窮している時期にエッツドルフが不要不急の寄付を行ったとして大使館に抗議し、さらにその後も、私的な記念碑であるにもかかわらず、碑文にドイツの鉄十字章が用いられていることを批判している。エッツドルフは碑の完成を見ずに1934年9月に帰国、外相ノイラート(Konstantin v. Neurath 1873-1956)の私設秘書となった。1938年には外務省筆頭参事官に就任するとともに突撃隊に加入し、上級大隊指導者を務めている。しかし反ヒトラー派の官僚・軍人とも繋がっており、1944年のヒトラー爆殺未遂事件、いわゆる七月二十日事件の際にも事前に情報を得ていた。

1938年8月16日～11月12日に第一回日独青少年団交歓事業の一環で来日したヒトラー・ユーゲントは8月31日に白虎隊の墓を参拝し、雨天をおしてエッツドルフの碑も見学している。第二次世界大戦後、やはりこの碑もGHQによって碑文を削られたが、エッツドルフの希望により、1953年に復元された。

飯盛山にはもう一つ、ドイツ人の建てた碑がある。ハイゼ(Richard Heise 1869-1940)とその

東北地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討

妻ヨシ（1895-1942）の墓である。1902年に来日、1924年まで東京高商等でドイツ語を教えた。いずれも在ドイツ日本大使となった武者小路公共（1882-1962）と来栖三郎（1886-1954）、経済学者で新カント主義者の左右田喜一郎（1881-1927）、印南博吉（1903-90）、久武雅夫（1903-2003）らを指導、さらに学習院で昭和天皇（1901-89）に進講した。また、北里柴三郎、神田乃武（1857-1923）、福田徳三（1874-1930）、林博太郎（1874-1968）とも親交を結んだ。ハイゼは山川健次郎やイギリス人宣教師のロイド（1852-1911）から白虎隊の話を知り、1908年に飯盛山を訪れ、1930年には『独逸人の見たる会津白虎隊』を執筆している。1940年に北京で客死、遺言に従い、武者小路や林ら友人門弟約400人が若松市の協力を得て、飯盛山に墓と「ハイゼ先生銘碑」を建てた。隣に、ドイツ・バイヤスドルフ社と花王の合併会社であるニベア花王の副社長を務めた息子のエーリヒ（1913-88）夫妻の墓が建っている。

Ⅲ. おわりに

日独関係史の観点から再確認されるのは、東北の豊かな人材、多様な史跡の存在である。時に辺土の扱いを受けてきたこの地域だが、十三湊の交易、サン・ファン・パウティスタ号の航海、異国船の来訪等も含めて国際的な交流の史実は多く、ドイツとの関りを示す事例にも恵まれている。また、一見すると日仏・日蘭・日露・日伊交流史だが、実はそこに「ドイツ」がしっかりと絡んでいることも見逃せない。本稿で論じることのできなかったものについては、表に記載する。

・東北地方に存する日独関係の史跡一覧

史 跡 名	住 所	備 考
木村産業研究所	青森県弘前市大字在府町	Ⅱ(1)に関連。前川國男の作品。
弘前市民会館、市立博物館、緑の相談所	青森県弘前市大字下白銀町 弘前公園内	Ⅱ(1)に関連。前川國男の作品。
弘前市庁舎	青森県弘前市大字上白銀町 1-1	Ⅱ(1)に関連。前川國男の作品。
弘前中央高校講堂	青森県弘前市大字蔵主町 7-1	Ⅱ(1)に関連。前川國男の作品。
弘前市立病院	青森県弘前市大字大町 3-8-1	Ⅱ(1)に関連。前川國男の作品。
弘前市斎場	青森県弘前市大字常盤坂 2-20-1	Ⅱ(1)に関連。前川國男の作品。
大曲のタウト碑	秋田県大仙市大曲浜町 6 丸子橋橋上公園	Ⅱ(1)に関連。
旧奈良家住宅（秋田県立博物館分館）	秋田県秋田市金足小泉上前 8	Ⅱ(1)に関連。重文。「菅江真澄の道」の一部。
白山神社能舞台	岩手県西磐井郡平泉町平泉衣関 173	Ⅱ(1)に関連。
商工省工芸指導所	宮城県仙台市宮城野区五輪 1-4-22	Ⅱ(1)に関連。タウトが勤務。
旧小坂鉱山事務所	秋田県鹿角郡小坂町小坂鉱山古館 48	Ⅱ(2)に関連。1905年竣工、重文。
康楽館	秋田県鹿角郡小坂町小坂鉱山松ノ下 2	Ⅱ(2)に関連。1910年竣工、重文。
秋田大学百周年記念館	秋田県秋田市手形住吉町 5-5	Ⅱ(2)に関連。秋田鉱山専門学校本館の外観を復元。

史 跡 名	住 所	備 考
秋田大学鉱業博物館	秋田県秋田市手形大沢 28-2	II (2) に関連。
旧阿仁鉱山外国人官舎	秋田県北秋田市阿仁銀山下新町 41-2	II (2) に関連。重文。
院内銀山異人館	秋田県湯沢市上院内小沢 115	II (2) に関連。
中国殉難烈士慰霊之碑	秋田県大館市花岡町長森 十瀬野公園内	II (2) に関連。国内に同様の碑が複数存在。
聖徳記念絵画館	東京都新宿区霞ヶ丘町 1-1	II (2) に関連。
吉岡銅山跡	岡山県高梁市成羽町坂本	II (2) に関連。岡山県高梁市成羽町吹屋の街並み。
オランダ島	岩手県下閉伊郡山田町飯岡	II (3) に関連。
ジュゼッペ・キアラ神父墓碑	東京都調布市富士見町 3-21-12 サレジオ神学院	II (3) に関連。敷地内にチマッティイ資料館がある。
久能山東照宮	静岡県静岡市駿河区根古屋 390	II (3) に関連。ビスカイノが徳川家康に献上した置時計を所蔵、重文。
高野長英記念館	岩手県奥州市水沢中上野町 1-9	II (4) に関連。
高野長英旧宅	岩手県奥州市水沢大畑小路 7	II (4) に関連。近くに生誕地。
後藤新平記念館	岩手県奥州市水沢大手町 4-1	II (4) に関連。正力松太郎 (1885-1969) の寄付による日本初の公民館「後藤伯記念公民館」が隣接。水沢公園、水沢江刺駅西口にも銅像。近くに箕作省吾 (1821-47)、山崎為徳 (1857-81) の碑。
斎藤實記念館	岩手県奥州市水沢吉小路 24	II (4) に関連。
高野家離座敷	埼玉県さいたま市緑区大字大間木 3-30-11	II (4) に関連。
「高野長英先生隠れ家」の碑	東京都港区南青山 5-6-23	II (4) に関連。
恩賜記念館	東京都八王子市館町 815-1 拓殖大学 八王子キャンパス	II (4) に関連。学長だった後藤関連の展示。
旧済生館本館 (山形市郷土館)	山形県山形市霞城町 1-1	II (5) に関連。重文。
医学講習場跡	愛知県名古屋市中区門前町 1-23 西本願寺別院	II (5) に関連。
「名古屋大学の源流」	愛知県名古屋市中区栄 1-19-21 堀川沿い	II (5) に関連。愛知医科大学の壁画。
三浦新七博士記念館	山形県山形市七日町 3-1-9 山形商工会議所	II (6) に関連。
河北町紅花資料館	山形県西村山郡河北町谷地戊 1143	II (6) に関連。堀米庸三 (1913-75) の生家。
三浦新七の胸像	東京都国立市中 2-1 一橋大学国立キャンパス西キャンパス 附属図書館	II (6) に関連。
斎藤茂吉記念館	山形県上山市北町弁天 1421	II (7) に関連。
石原莞爾の墓所	山形県飽海郡遊佐町菅里菅野	II (7) に関連。
鶴ヶ岡城址公園 (鶴岡公園)	山形県鶴岡市馬場町 4-1	II (7) に関連。敷地内に石原莞爾生誕地の碑。大寶館に石原関係の展示。
旧光丘文庫	山形県酒田市日吉町 1-10 日和山公園	II (7) に関連。石原や大川周明 (1886-1957) 関連の資料は市役所中町庁舎 (中町 1-4-10) に。敷地内の日枝神社に大川周明顕彰碑

東北地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討

史 跡 名	住 所	備 考
東北大学資料館	宮城県仙台市青葉区片平 2-1-1	II (8)に関連。
ハンス・モーリッシュの樹	宮城県仙台市青葉区	II (8)に関連。
東北大学植物園津田記念館	宮城県仙台市青葉区川内 12-2	II (8)に関連。
魯迅の階段教室 (旧仙台医学専門学校六号教室)	宮城県仙台市青葉区片平 2-1	II (8)に関連。魯迅 (1881-1936) は日本留学中 (1902-09) にニーチェ (Friedrich W. Nietzsche 1844-1900) やシュテイナー (Max Stirner 1806-56) を知り、独逸学協会のドイツ語学校でも学んだ。
儀兵衛・多十郎のロシア漂流碑	宮城県東松島市宮戸字鹿鷹	II (9)に関連。
若宮丸遭難供養碑	宮城県石巻市山下町 1-4-8 禅昌寺	II (9)に関連。
太郎の墓碑	宮城県東松島市宮戸字門前 13 観音寺	II (9)に関連。
岩手大学ミュージアム・農業教育資料館	岩手県盛岡市上田 3-18-8	II (9)に関連。須川長之助関連のコレクション。農業教育資料館は重文。
志和稲荷神社の須永長之助寿碑	岩手県紫波郡紫波町升沢前平 17-1	II (9)に関連。水分公民館内にゆかりの展示物、城山公園にも顕彰碑。
会津日新館	福島県会津若松市河東町南高野高塚山 10	II (10)に関連。
日新館天文台跡	福島県会津若松市米代 1-1-55	II (10)に関連。
山本覚馬・新島八重生誕地の碑	福島県会津若松市米代 2-1-23	II (10)に関連。
山本覚馬・八重邸宅跡	京都府京都市中京区下丸屋町	II (10)に関連。
同志社墓地	京都府京都市左京区鹿ヶ谷若王子山町	新島襄・八重、山本覚馬、山崎為徳等の墓。
松江豊寿の記念碑	福島県会津若松市城東町 12-1 會津風雅堂前広場	II (10)に関連。
松江豊寿大佐の住居跡	徳島県徳島市藍場町 2	II (10)に関連。
鳴門ドイツ館前の松江豊寿胸像	徳島県鳴門市大麻町桧東山田 55-2	II (10)に関連。
東海散士柴四朗の墓碑	静岡県熱海市水口町 17-24 海蔵寺	II (10)に関連。坪内逍遙夫妻の墓も。
志賀潔と赤星研造の墓	宮城県仙台市青葉区北山 1-14-1 輪王寺	II (10)に関連。志賀潔 (1871-1957) もドイツに留学、エールリヒ (Paul Ehrlich 1854-1915) に師事。
飯盛山の碑	福島県会津若松市一箕町大字八幡弁天下	II (11)に関連。
会津藩士の墓地	阿弥陀寺 (福島県会津若松市七日町 4-20)、金戒光明寺 (京都府京都市左京区黒谷町)、腰越墓地 (神奈川県横須賀市鴨居 3-24-13)、会津墓地 (新潟県上越市大字大貫) 等	II (11)に関連。会津若松市内に西軍墓地もある (大町 2-1-5)。
ハイゼの原	東京都豊島区南池袋 4-8-55 南池袋第二公園。	II (11)に関連。
五城目町役場大川地区公民館の木村謹治記念室	秋田県南秋田郡五城目町大川下樋口字屋敷下 3-2	独文学者の木村謹治 (1889-1948) は、鶴岡出身の相良守峯 (1895-1989) と「キムラ・サガラ」を編纂。
東京ゲート記念館	東京都北区西ヶ原 2-30-1	実業家の粉川忠 (1907-89) が建設。木村謹治に師事。

史 跡 名	住 所	備 考
新渡戸稲造記念公園	北海道札幌市中央区南4東4-2-1	新渡戸稲造(1862-1933)はドイツ留学中(1887-91)に『武士道』(1900)を構想。
新渡戸記念館	青森県十和田市東三番町24-1	休館中。
盛岡市先人記念館	岩手県盛岡市本宮蛇屋敷2-2	新渡戸稲造等に関連。
新渡戸稲造生誕の地	岩手県盛岡市下ノ橋町4-4-020-0877	他に新渡戸稲造顕彰碑(盛岡市内丸1)、新渡戸稲造胸像(盛岡市盛岡駅前通1滝の広場内)等。
花巻新渡戸記念館	岩手県花巻市高松9-21	新渡戸に関連。
釜石市立鉄の歴史館	岩手県釜石市大平町3-12-7	1874、ドイツ人技師の関与。ルイス・ピヤンヒー、釜石に赴任。6月、大島高任とピヤンヒーとの間で官営製鉄所の建設地をめぐる論争。政府は外国傭技師の意見を尊重。
橋野鉄鉱山	岩手県釜石市橋野町2-6	世界遺産。
平田東助座像	山形県米沢市西大通1-5-60 米沢市すこやかセンター	平田東助(1849-1925)は岩倉使節団に随行、ドイツに留学。農商相等を歴任。
高橋里美顕彰碑	山形県鶴岡市みずほ33-3 鶴岡市立上郷小学校	高橋里美(1886-1964)は哲学者。現象学を紹介。
三井家蔵座敷	山形県鶴岡市本町1-4-11	独文学者の三井光弥(1890-1952)の実家。青年期の木田元(1928-2014)が通った。
志賀潔胸像	宮城県仙台市青葉区本町3-9-2 勾当台公園	
吉野作造記念館	宮城県大崎市古川福沼1-2-3	ドイツ留学。井口孝親訳『ローザ・ルクセンブルクの手紙およびその生涯』(1925)は長谷川如是閑(1875-1969)と吉野(1878-1933)の序文。
高山外国人避暑	宮城県宮城郡七ヶ浜町花瀨浜浜沼	日本三大外国人避暑地。レーヴィットが滞在。
土井晩翠の胸像	宮城県仙台市青葉区川内1 仙台城址	土井晩翠(1871-1952)はライブツィヒ留学。他に会津若松市の鶴ヶ城三の丸にも。
晩翠草堂	宮城県仙台市青葉区大町1-2-2	晩年の住居。奥に「仙台ユネスコ会館跡地」。
土井晩翠の墓	宮城県仙台市若林区新寺4-7-6 大林寺	
東北大学文学部阿部次郎記念館	宮城県仙台市青葉区米ヶ袋3-4-29	阿部次郎(1883-1959)は茂吉と親交。ドイツ留学。
阿部記念館	山形県酒田市山寺宅地179-1	
馬場為八郎の碑	秋田県由利本荘市岩城亀田最上町104 妙慶寺	馬場為八郎(1769-1838)はシーボルト事件に連座。
鳥潟会館(旧鳥潟家住宅・庭園)	秋田県大館市花岡町根井下156	ドイツ公演を行い、ヴィルヘルム一世(Wilhelm I. 1797-1888)に招かれた曲芸師、鳥潟小三吉(1842-1909)、生理学者の鳥潟隆三(1877-1952)、TYK式無線電話の発明者、鳥潟右一(1883-1923)等の展示。

東北地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討

注

- (1) 小原淳「北海道に存するドイツ関連史跡の総合的検討―日独関係史の再検討に向けて」『WASEDA RILAS JOURNAL』8、2020年。
- (2) ブルーノ・タウト、篠田英雄訳『日本―タウトの日記』全3巻、岩波書店、1975年；太宰治『津軽』新潮社、2004年（1944年初出）；宮内嘉久『前川國男一賊軍の将』晶文社、2005年；松隈洋『建築の前夜―前川國男論』みすず書房、2016年。
- (3) 佐々木正勇「フライベルク鉱山学校の日本人留学生」『日本大学人文科学研究所研究紀要』31、1985年；植田晃一「クルト・ネッターの生涯」1～17『資源と素材 資源・素材学会誌』112-1～114-3、1996～98年；本田敏雄「フライベルクへ留学した人々」八戸工業高等専門学校『資源・素材』1998-2、1998年；岡田有功「鉱山開発と地域環境―1880年代における小坂銀山の技術と経営を中心として」『経営史学』37-1、2002年；松尾展成『日本＝ザクセン文化交流史研究』大学教育出版、2005年；金光男「お雇い外国人地質学者の来日経緯―一人鉱山地質学者ネッター」5～7『地学教育と科学運動』63～65、2010～11年；Wolfgang Michel, Curt Adolf Netto (1847-1909): Ein Deutscher im Japan der Meiji-Ära, in: *Japanisch-Deutsche Gesellschaft Westjapan: Jahresbericht*, 8, 1984; Robert B. Heimann, Rainer Slotta, Curt Adolph Netto. *Ein Kosmopolit aus Freiberg/Sachsen 1847-1909*, Bochum 1999.
- (4) ウィレム・フルステーヘン、永積洋子訳『南部漂着記―南部山田浦漂着のオランダ船長コルネリス・スハープの日記』キリシタン文化研究会、1974年；山田町津波誌編纂委員会編『山田町津波誌』山田町教育委員会、1982年（デジタル版、2018年）；東大史料編纂所『日本関係海外史料 オランダ商館長日記 訳文編之八上』、東京大学出版会、1995年；レイニアー・H・ヘスリンク、鈴木邦子訳『オランダ人捕縛から探る近世史』山田町教育委員会、1998年；グンナル・ムレーン、延岡繁訳「日本に初めて来たスウェーデン人フレデリック・コイエットの人生」1～5、中部大学人文学部『人文学部研究論集』5～10、2001～2003年。
- (5) 後藤新平監修、森孝三編『ビスマルク演説集』上・中・下、ビスマルク演説集刊行会、1919年；三宅正樹著『ユーラシア外交史研究』河出書房新社、2000年；「資料 厳島夜話（1907年）」藤原書店『環』8、2002年；鶴見祐輔『正伝後藤新平・決定版』全8巻・別巻、藤原書店、2004-07年；今西一「平野義太郎の〈大アジア主義〉」『小樽商科大学人文研究』115、2008年。
- (6) Emil Schalk, *Der Wettkampf der Völker: mit besonderer Bezugnahme auf Deutschland und die Vereinigten Staaten von Nord-Amerika*, Jena 1905. 同論文は、社会ダーウィニズム思想の浸透を目的として1900年にクルップがもうけた懸賞への応募論文で、ヘッケル (Ernst Haeckel 1834-1919) やフラース (Eberhard Fraas 1862-1915)、ツィーグラー (Ernst Ziegler 1849-1905) が委員を務め、大賞はシャルマイヤー (Wilhelm Schallmayer 1857-1919) が受賞している。Uwe Hoßfeld, *Geschichte der biologischen Anthropologie in Deutschland: Von den Anfängen bis in die Nachkriegszeit*, Stuttgart 2005, S. 200ff. 後藤のドイツへの支援については、小原、前掲論文を参照。
- (7) 安井広「愛知県公立医学校におけるフォン・ローレツの事蹟」『日本医史学雑誌』23-1、1977年；田中英夫『御雇外国人ローレツと医学教育―愛知県公立医学校における新ウィーン学派医学の受容』名古屋大学出版会、1995年；小形利彦『山形県済生館の洋学史的研究』大風印刷、2011年；南光進一郎『ヤウレックとフロイト』日本評論社、2012年。
- (8) 上原専禄『ランプレヒト歴史的思考入門』日本評論社、1942年；三浦新七『東西文明史論考―国民性の研究』岩波書店、1950年；土肥恒之『西洋史学の先駆者たち』中央公論新社、2012年；花谷賢一『永遠の学徒―三浦新七博士とその時代』山形商工会議所、2017年；Luise Schorn-Schütte, *Karl Lamprecht. Kulturgeschichte zwischen Wissenschaft und Politik*, Göttingen 1984; Roger Chickering, *Karl Lamprecht. A German Academic Life*, Atlantic Highlands 1993; Ines Mann, Rolf Schumann, *Karl Lamprecht. Einsichten in ein Historikerleben*, Leipzig 2006.
- (9) 斎藤茂吉『斎藤茂吉全集 書簡集1』第52巻、岩波書店、1956年；山上次郎『斎藤茂吉の生涯』文藝春秋、

- 1974年；玉井禮一郎編『石原莞爾選集2 ベルリンから妻へ』たまいらば出版、1985年；Hanns H. Hofmann, *Der Hitlerputsch: Krisenjahre deutscher Geschichte 1920-1924*, München 1961; Ernst Deuerlein, *Der Hitler-Putsch: Bayerische Dokumente zum 8./9. November 1923*, Stuttgart 1962.
- (10) 渋谷章『回想のモーリッシュ』内田老鶴圃、1979年；ハンス・モーリッシュ、瀬野文教『植物学者モーリッシュの大正ニッポン観察記』草思社、2003年；カール・レーヴィット『ナチズムと私の生活—仙台からの告発』；クルト・ジンガー、鯖田豊之訳『三種の神器—西洋人の日本文化史観』講談社、1994年；山田奨治『禪という名の日本丸』弘文堂、2005年；上野正二「オイゲン・ヘリゲルの禅理解—鈴木大拙の掌上で」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』45、2008年；Brian Victoria, A Zen Nazi in Wartime Japan. Count Dürckheim and his Sources: D.T. Suzuki, Yasutani Haku'un and Eugen Herrigel, in: *The Asia-Pacific Journal*, 12, 2014.
- (11) Birgit Nemeč, Klaus Taschwer, Terror gegen Tandler: Kontext und Chronik der antisemitischen Attacken am I. Anatomischen Institut der Universität Wien, 1910 bis 1933, in: Oliver Rathkolb (Hg.), *Der lange Schatten des Antisemitismus: Kritische Auseinandersetzungen mit der Geschichte der Universität Wien im 19. und 20. Jahrhundert*, Wien 2013, S.162.
- (12) クルウゼンシュテルン、羽仁五郎訳・注『クルウゼンシュテルン日本紀行』上下巻、駿南社、1931年；大槻玄沢、志村弘強編、池田皓訳『環海異聞』雄松堂出版、1989年；加藤九祚『初めて世界一周した日本人』新潮社、1993年；大島幹雄『魯西亜から来た日本人—漂流民善六物語』廣濟堂出版、1996年；木崎良平『仙台漂流民とレザノフ—幕末日露交渉史の一側面 No.2』刀水書房、1997年；石巻若宮丸漂流民の会『世界一周した漂流民』ユーラシア・ブックレット、2003年；杉本つとむ『日魯交流人物史話』東洋書店、2013年；Williams, Glyn, *Naturalists at Sea: scientific travellers from Dampier to Darwin*, New Haven 2013; Hartmut Berghoff, Frank Biess, Ulrike Strasser (ed.), *Explorations and Entanglements. Germans in Pacific Worlds from the Early Modern Period to World War I*, New York / Oxford 2019.
- (13) 森川潤「維新期のドイツ留学生の光と影—ドイツ大学最初の日本人学籍登録者赤星研造について」『日本医史学雑誌』40-4、1994年；同『明治期のドイツ留学生—ドイツ大学日本人学籍登録者の研究』丸善雄松堂、2009年；荒木康彦『近代日独交渉史研究序説—最初のドイツ大学日本人学生馬島清治とカール・レーマン』雄松堂、2003年；中井けやき『明治の兄弟 柴太郎—東海散士柴四朗・柴五郎』文芸社、2008年；青山霞村、田村敬男編『山本覚馬伝』宮帯出版社、2013年。
- (14) 小原淳、前掲論文。
- (15) ただし、オランダ東インド会社の社員だったドイツ人の父カールと日本人の母をもつハルツィング (Peter Hartzing 1637-80) が、デュースブルク大学の1655年11月1日付けの学籍簿に“Petrus Hartsingius Japonesis”として登録されている。小澤健志「17世紀のドイツを觀た長崎・平戸出身の日本人」西日本日独協会『Jahresbericht』36、2012年。
- (16) リヒャルト・ハイゼ、結城司郎次訳『独逸人の見たる会津白虎隊』飯盛寿、子、1941年；飯盛正日編著『白虎隊精神秘話』山主飯盛本店、1992年；中道寿一『君はヒトラー・ユーゲントを見たか？—規律と熱狂、あるいはメカニカルな美』南窓社、1999年；藤岡寛己「下位春吉とイタリア=ファシズム—ダンヌンツィオ、ムッソリーニ、日本」『福岡国際大学紀要』25、2011年；瀬野文教『リヒャルト・ハイゼ物語—白虎隊の丘に眠る或るドイツ人の半生』中央公論新社、2012年；福家崇洋『日本ファシズム論争—大戦前夜の思想家たち』河出書房新社、2012年；エックハルト・コンツェ他、稲川照芳・足立ラーベ加代・手塚和彰訳『ドイツ外務省〈過去と罪〉—第三帝国から連邦共和国体制下の外交官言行録』えにし書房、2018年；Rainer A. Blasius (Hg.), *Hasso von Etdorf. Ein deutscher Diplomat im 20. Jahrhundert*, Haumesser, Zürich 1994; ders., *Hasso von Etdorf. vom Königlich Preußischen Leutnant zum Botschafter der Bundesrepublik*. in: Sebastian Sigler (Hg.), *Corpsstudenten im Widerstand gegen Hitler*, Berlin 2014.; Hans-Joachim Bieber, *SS und Samurai: Deutsch-japanische Kulturbeziehungen 1933-1945*, München 2014.